

長 浜 郷 土 誌

工 藤 淨 真

はじめに

昨年度より町内各地域の集落誌を取上げ研究調査の結果を報告してきた。本年度は長濱（シサンベツ）について報告する。

この報告についての内容は調査の限界があり、また、資料不足等の事情があって完全なものとは言えない。

特に移住開拓の年代の調査には不可能に近い状況が多く、「推定」という判断より他なく、他の集落に比較して最も遅い年代と考えられる資料が多い。

あらまし

長浜は西に隣接する久連と東に隣接する神磯との中に位置する集落である。

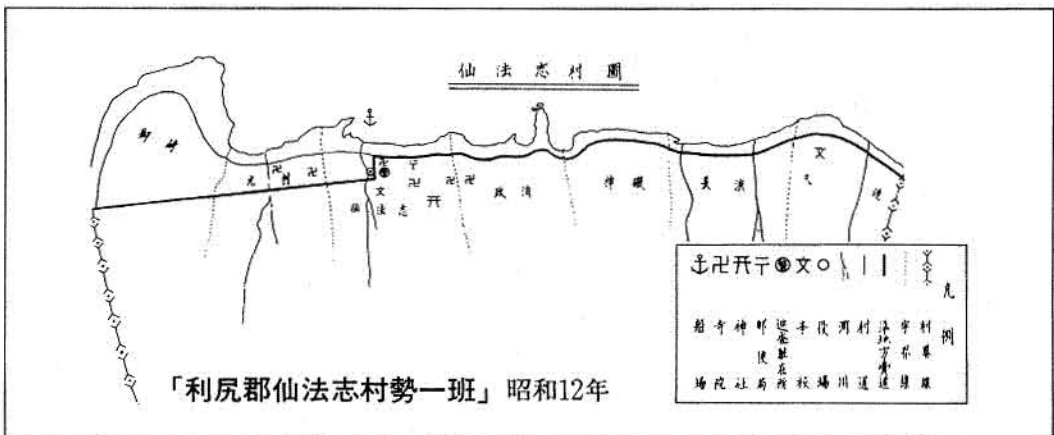
この居住者は移住当時より久連の居住者とは異なり、旧鬼脇村市街地、または旧仙法志村市街との住来者が多く生活圏も異なっている。久連から杢形、長浜から仙法志の距離的には同程度である。

長浜への来住の経過地点として、利尻東部即ち、旧鬼脇、仙法志の各村が多く、祖先の出身県に於ては集団的であり、更には定住性にやゝ欠ける特長もみられる。

移住当時より多くの漁民は鯨漁時代までは定置建網漁業の雇用労働者であり、他の期間は海藻類の採取の労働であった。

従って冬期間は地形的悪条件もあって沖への出漁はなく、森林伐採して生活を支えていた者も多かった。

鯨漁のなくなった現在では、夏期間の漁期間でも漁業に就労する一方、他の建設関係の仕事に従事し、臨時労働者となり、冬期間に本州への出稼ぎ者が秋から春に亘って20数年続いており、特に



高令化が進み、子供の居住する都市に転出し、過疎化の著しい点があげられる。

1. 地 域

(1) 地名地形並びに気象

この地域の地名については定説や由来は不明である。

一地域として最も長い海岸、謂ゆる長い浜の意と考えられる。

公的には大正6年より長浜と久連とに分離されたもので、以前は両者を含めてもシサンベツと呼ばれていた。シサンベツの意について明らかな根拠が見当たらない。

地域の範囲は大空沢付近の集落から北沢の沢までで、大空沢周辺一帯は神磯の地番であるが行政組織上、または便宜上現状になっている。

この間に一斑の所の沢から柴田の沢、ジンベ下の沢、北沢の沢など6ヶ所あって、浜辺は狭い所で10米程、広い所で30米程あって、直に屏風状の断崖になっていて大久連に類似しているがそれ程高くはない。

浜は全部が石浜で岩によって形成された澗は全くなく、地形的には漁業を営む者にとっては最も条件が悪い地点である。

各沢には各々民家は現在はなく、その周辺には若干の樹木が見られる程度で昔の乱伐の為である。エゾ松、トド松が殆どで、更に奥は根曲り竹について山麓に造林が進み、白樺、各松の森林が見られる用になったのは最近である。

燃料としての伐採は現在も行われている。この地区は4つの特異な4の小集落がある。治水事業として近年大空沢ダムが完成した。

(2) 移住とその経路

開拓移住の最初の年代は利尻島の中の集落では最も遅く、明治20年代の後半ではないかと考えられる。

古文書によると、明治17年には利尻郡戸数表中のシサンベツが表記されていない。即ち本籍者も寄留者も1戸もなかった事になる。

旧仙法志村の戸数は明治21年の9戸から、明治24年の70戸と急増しているが、本州より直ちに移住定着したのではなく、殆どが島内東部の各地域からの再移住であって更にこれが同村西部に再移転したものである。

当地の古老の話に依ると、最初から長浜に移住したのではなく、旧鬼脇各地域、または旧仙法志村御崎、元村、マオヤニ住み、2、3年してから定住した人が多いという。

従って地理的に比較的条件のよい旧仙法志東部に住み着いたのが明治22年頃から27年、8年頃ではなかったかと推定される。

この間長浜沖への海藻類採取等が行われ、鬼脇方面からの出稼ぎで昆布取りも何年か続け、以後定住するようになった人も多い。

現在の長浜の源形は明治30年前後から37、8年にかけてであると総合的な観点から考えられる事である。

移住の経路は旧鬼脇村ヤマナイ、(現在の清川)からは因幡衆、(取鳥県人)字メヌシヨロ、(現在南浜)からの秋田衆、津軽衆、(青森県津軽半島とその南部)である。

また、旧仙法志村ヤマナカ、(現在の御崎)から秋田衆や津軽衆の若干人で、センハウシ(現在の元村)からは越前衆、(福井県人)マオヤニ、(現在本町)政治からは各県人である。

鴛泊-沓形の経路をとったのは加賀衆(石川県人)や越後衆、(新潟県人)等若干人で、越中衆はごく少数ではあるが旧沓形ビヤコロ、(現在の新湊)等から他はまちまちである。越中衆はホマワンドのホマで生計を立てる事を目的とし移転して来たという。

旧仙法村内に転住した人々の多くは明治31年6月15日に発生した山火事に依って山林焼火して焼野原となり、燃料に困り豊富な森林の燃料のある長浜に移って来たという。

祖先の出身県別をみると、大正7年の長浜戸数約百戸の中、圧倒的に秋田衆が多く、約40%を占めている。次いで因幡衆の9%、越前衆の8%、加賀衆の5%、越後衆の4%津軽衆の5%、越中衆、宮城県の各2%、岡山県、岩手県の各1%で道内10%、他は不明となっている。

現在では約百戸あった戸数も37戸に減少し、利尻町内中最も高令化が進み、空家が目立ち30歳代から40歳の年令層殆どなく、20歳台2名だけという現状である。

引越先は札幌が多く、稚内や道内の各地域そして本州も若干あって今後も益々減少し、過疎化は進んで行く状況にある。

従って、対外的にも内部的にも自治会にしても、また、居住する人にとって様々な問題をはらんでいる。老人家庭が多い地区である。

(3) 一年の暮らし

ここに転住し住居を構えた人々は皆漁夫ではなく、百姓、木曳、大工等各種まちまちであったが、全員は何らかの形で鯉建網漁場の手間取漁夫として働いた。

1) 春 (4月~6月)

1・5軒間の距離の長浜には9か統もの鯉建漁場があって住民の殆どがここで働く、手間取り漁民であった。

その合間を見ては山のように寄せ来る「ホマ」を拾い、粕にして売ったり、自給自足の畑作物の肥料とした。

ホマ拾い専門の漁夫もあり、1年間の生活費をホマ粕を製造し売ることによって稼いだ人々もいたという。

ここ、神磯の端から長浜に入る間に約700米に亘る湾があって大量のホマが打ち寄せる箇所として、「ホマワンド」と呼ばれてきた。

このホマに目を付けた住民は地元の優先的にホマ拾いが出来る事から、5、6戸の家屋があった。

現在はないが大正年代に大雪崩で二人の犠牲者（死者）を出し、家屋も倒壊し、危険地帯として神磯か長浜に強制的に移動された。澗がない為鯨は杵船取りで危険があった。

このホマワンドは浜が狭く丘も充分な広さもなく、直ちに断崖状の土堤になっていて、雪崩も発生しやすく、また、大波に依って通行も出来なくなる状態が年間通じて何回かはおきた所であった。石浜の為に海藻類はよくなかった。ホマ拾いは東端のドンジャ町、トックリ町の人々に多かった。

2) 夏 (6月～9月)

久連住民と殆ど同じであったが石浜の為に小さな澗作りに苦勞が多かった。昆布は余り良質なものがなく、他の地域に比べて価格の面でも不利であった。

3) 秋 (9月～10月)

他地域と殆ど同じようなものであったが、この地域は海士もいて潜水採取する天草が多く出荷された。これは因幡衆の人々で「イナバ町」と呼ばれ、経済的に楽な人々が多かった。

4) 冬 (11月～3月)

この時季になると「アワビ」取りが始まる。「タコ」漁も始まるがここでは着業者は殆どいなかったようである。

一斉に始まるのが山林の伐り出して生活費を稼いだ。

女の人達は海辺での「フノリ」取り、次に「ギンナン草」を採取して生活費の足しにし、細目昆布拾いもして生活した人がここでは少ない。

しかし、三味線に太鼓を用意し、演芸団を作り、鯨漁期以外の日々の殆どを歌や太鼓で楽しんだ人々も多く、西端の小集落はこの意味から「キラク町」と名付けられ、今もなつかしむ人々がいる。

5) その他

家屋、食生活等その他の生活状態は他地域と殆ど変わらないが、気持ちの面では比較的のんびりした風習があった。

日常生活に欠かせない飲料水は無論井戸だけであった。この地区には六か所あった。殆どが鯨漁夫の番屋近くに作られ、1箇班乃至2箇班で1か所の井戸を利用していた。

周辺住民の協力により作られた所もあったろうが、番屋の近くにあったのは近所の人々の協力を得て番屋の利用中心とした井戸であったようである。

各戸に風呂が設けられるようになったのは戦後昭和30年後半であり、風呂のある家も汲み水であるから回数も自ら制限があった。この地区には銭湯もなかったし、マオヤニ、政治まで来なければ入れない不便さで、貰風呂もお互いにし合ったという。

(4) 道路 (交通)

長浜地区内の道路は平で坂は現在坂ノ上バス停の所だけであり、橋は大空沢にかけられている大空橋の1か所で大きな起伏はない。屏風状のの断崖堤に接して道路があり、従って沢のある所以外は殆ど道路より海側に民家があって道路に接して久連とは対象的である。水野の沢に現在使用していない山道がある。浜辺に沿う道路で1本道である。西端にはこの道路から山林道が昭和53年に設けられている。ここ以外に小林道があるが、竹ノ子道路で全く使用されていない。交通の状況は久連と殆ど同じである。

(5) 治安及び医療

明治39年から41年までの2年間請願巡査の派出所が置かれた事がある。現1班黒沢宅近くにあった藤田という警察だったという。以後は置かれることはなかった。

医療は久連地区住民と違い、村医のあるマオヤニか杓形の村医か開業医に依存していた。一時久連に開業していた診療所にも診療を依頼した事もあった。大正10年3月から昭和五年までである。

戦後は仙法志診療所と杓形の病院に通っていたが9年前に仙法志では山口医師の死亡と同時に閉鎖された。その後杓形への診療を受ける人が殆どであるが鬼脇道立病院に通う患者も若干いるようである。

3年前に杓形に利尻島中央病院が完成し、福祉バスを運航しており、これを利用している。

昭和42年より杓形より週2回、現在は週3回の出張診療であるが歯科医がいて、仙法志か杓形、また昨年新しく個人開業した歯科医院の何れかに出向き診療を受けている。利尻町立歯科診療所である。

2 産 業

(1) 漁 業

長浜地区の100%近くは何らかの形で漁業に従い、移住史そのものが漁業と一体であった。この地区の1、5軒の距離の中に9ヶ統の罾建網漁場があった。そして何れかの漁場の臨時雇用労働者即ち出面取りとして労働したものであって、自営事業家謂る罾刺網漁業者は殆どなく、戦後になって刺網業者が増加したものである。

また、久連とは異なって、天草、の採取は活発で見逃せない生活費として生産した。

罾建網漁場の位置は仙法志罾建網漁場番号で表すと東45号より55号までであるが毎年休業箇所が1ヶ統から3ヶ統あったから実際着業者数は6ヶ統から8ヶ統であった。

この場所は小樽の遠藤又兵衛氏より秋田県宮嶋貞治氏が漁権借受けして、鬼脇の赤坂市三郎氏に移り、そして平田豊作氏の所有になったのが明治41年4月5日付で登録された51号から55号の5ヶ統が長浜にあった。

次に明治39年2月2日公示で鬼脇の大家末吉氏から譲受けた砂田弥一郎氏の46号でここは翌年田中房吉氏に渡っている。47号から50号の4ヶ統は函館の栗山三蔵氏からその後譲受けている。

これら10ヶ統が長浜地区内にあった。漁業権者は昭和5年の合同漁業株式会社に参加するまで続いたものと考えられる。合同漁業KKの発足に依り、漁業権を貸付ける形で着業した。そして昭和23年の解散時までには合同漁業KKの職員派遣や地元有力者により実際には経営された。長浜で6ヶ統が合同漁業KKに参加し、解散後は元職員や地元外からの経営者も表れて昭和31年の鯨漁の皆無まで続けられた。

長浜で借受人としての経営者、自分の漁権で着業した氏名を掲げてみると

	大正3年	大正7年	昭和23年
第45号	平田 豊作	石垣 乙松	休 業
第46号	長尾勝太郎	石垣 乙松	清水 義一
第47号	藤田伊三郎	石垣 佐吉	兼平 福蔵
第48号	田中 勝造	平田 豊作	畑宮八三郎
第49号	初馬 鹿造	中島与伊太	三浦 佐吉
第50号	中島与伊太	安田 政吉	沢田 鉄蔵
第52号	石垣 乙松	石垣 乙松	坂 弘
第53号	石垣 佐吉	平田 豊作	栗山与五郎
第54号	初馬 鹿造	加藤 幸助	石川 政士
第55号	初馬 鹿造	加藤 幸助	休 業

第51号は大正年代以後着業する経営者はなく、昭和23年代は8ヶ統の建網が着業した。

大正年代には平田豊作、杓形の滝野善平、仲谷勇五郎、加藤幸助、砂田弥一郎の各氏等らの間に鯨漁権者が大きく移動した。

現在の牧野吉太郎、黒沢、鎌田、富山、佐藤清治、石垣栄、加藤正美、森本清栄、石垣満、大高の各氏宅の付近に番屋があって、この地域の東端より西端まで数多くあり、旧仙法志村各地区中最多数で賑わいを見せていた。

現在ではウニ、昆布の両漁業だけである。

スケツ鱈は若干の着業者はあったが漁そのものの不振で全体的に廃業し、鯨漁は従事する者はいたが経営者はいなかった。

年間通じての漁業者は4戸で本格的着業者は1名である。昆布養殖業者は2名である。

昭和59年に町営施設としてのサケマス孵化場完成し、明年より本格的漁獲計画が進められている。場所は大空沢沿いのダム付近である。

昨年より来遊も増加して釣人で賑わうようになっている。

鱈釣業者は以前よりなかった。

(2) 農業その他

他の地域と全く同じであるが沃度製造業者はいなかった。養蚕は副業として3戸あった。

(3) 商業とその他

この地区には3軒の商店があり、鈴木、畑宮、槇の各氏で1班から4班の地内にあった。何れの商店も雑貨商で槇秀治氏は水産物仲買人や鯨漁業者への仕込みもしていたという。何れも大正年代から昭和初期までであるが槇商店は最近まで続いていた。

鈴木伊三郎商店は明治40年前後の移住と考えられ野坂清衛門後の家屋に住み商店を開業し大正年間から昭和の初めまで営業したという。その後現在の牧野清三氏がこの家に入っている。

石川県人畑宮玄之吉商店はその子八三郎氏に変わり戦前まで営業し後漁業にも従事した。明治年代より開業し親子二代の後三代目公氏5、6年前に畑宮公食品という会社設立し、水産加工場を設け年間経営し、30名程の労働者がいる。加工と販売を営み御崎にも店舗を拡張進出している。

槇商店は秀治氏は明治末期に秋田県より来住し、幅広い商業活動を展開し、芳郎氏その婦人マツエ氏と続き、昭和22年には青森県より移転して、この商店を後継したのは、工藤与三郎氏である。同氏は昭和62年死去し商店を閉じた。

その他に、明治25年以前にマオヤニに、(現在の砂田氏)鳥取県より移住し、北前船を以て取引し、豪商と言われた坂口喜代松氏がいる。明治40年同氏死去後、その子勝次郎氏長浜に移転し、金融業的商人であったが戦後まもなく函館に転出した。

また、新谷辰之助氏その子伊佐久氏がいる。明治30年頃に越前より来島し、数多くの仕事を巧みにこなす人として知られている。専業ではないが菓子の製造販売や行商して戦後まで居住していたが鯨漁皆無後転出した。

更に、昭和36年になって桧山利夫氏は豆腐製造及び販売業を始め現在営業中である。

佐藤吉實氏は昭和21年に一時旅館業を営んだがその後雑貨商、自転車修理販売業と共に開業し今日に及んでいる。

鈴木商店は現牧野清三氏宅の所で道路に接した浜側であり、畑宮商店は昨年新築された場所より30米程東寄りて道路に接して山側であった。水産加工場は兼平氏宅の西側で道路に接し浜側にある。

坂口氏宅は現在の畑宮氏宅の所であり、桧山豆腐店は自治会館の東隣りである。

新谷氏宅は神社近くの道路の浜側で家屋はない。この東隣りに畑宮与三郎氏は戦前後2、3年間商をした事があった。

佐藤商店と槇(工藤)商店は1軒狭んで両隣りで現在4班、即ちキラク町である。昨秋工藤商店は約80年間の歴史を閉じた。

大工では現2班、ノンキ町に集中し、宮松船大工が細工場を所有し経営した。

この人は越中衆でビヤコロより転した人であり、宮松与次郎で現在は転出し家屋はない。

また、小林栄蔵、末永金蔵両氏は両隣りで前者は新潟から函館から利尻へと移転来住した船大工

であり、後者は宮城県から来住した屋大工であった。

宮松氏明治後、小林氏は明治30年頃、末永氏は明治末期の来住で、宮松、末永の両氏は既に移転し、59年に小林氏は死去した。

本間三平氏は現在の1班の地に住み、俗称ドンジャ町である。当初は大空沢であった。

本間氏は御崎、元村から長浜に移転したのは明治31年であった。

氏は木曳として知られ、明治から大正にかけて養蚕もし、漁業にも従事した。新潟県佐渡の出身である。戦後鶴川に転出し家屋はない。

明治20年代に来住したと思われる、野坂清衛門、黒萩基の両氏は明治後半には長浜に居住していない。詳しい職種は不明であるが、工業関係の仕事をしていたという。

両者共に当初はマオヤニ、または元村に居住していたものと思われる。

それから、戦後になって樺太より引き揚げて来た、櫛引亀太郎、亀之進の両氏は現在の三班の地の石川運五氏の移転後の家屋に住み、本職である鍛冶屋業を小規模ながら始めたが老令化と共に廃業した。十数年間程であった。青森県出身者で戦前に政治のワンドに居住し、その仕事をしていた人で現在はいない。

3. 行政組織

(1) 部落名変更とその組織

現在の長浜は旧仙法志村開村の明治35年当時は仙法志村字シサンベツと呼ばれていた。

それは現在の久連を含む総称であったが人口の急増と広範に亘る為の不便支障があつて大正5年12月の村議会において現在のように分離し、第6部を長浜とし、第7部を新しく設けて玖津礼（久連の前の表した文字）として2区にする事に議決している。

従つて大正6年より正式に呼称されるようになった。（詳細記録は当年報第7集に掲載）

以上に依つて大正5年まではこの地域は同一部落の第6部として部長平田豊作氏であった。そして、大正6年には第7部、（久連）は平田豊作氏、第7部（長浜）は服部安太郎氏の両部長となつて新しく発足したものである。

長浜（部長、区長、部落会長、自治会長）

初代部長	平田豊作氏	開村時より大正6年8月12日まで
2代部長	服部安太郎	大正6年8月13日より大正7年4月16日まで
3代部長	森本金太郎	大正7年4月17日より大正11年12月4日まで
4代部長(区長)	柴田作五郎	大正11年12月5日より昭和14年12月20日まで (昭和3年区長に呼称変更)
5代区長	高野 清氏	昭和14年12月21日より昭和17年12月31日まで (昭和15年部落会長名)
6代部落会長	森本 信義氏	昭和18年1月1日より昭和20年12月31日まで
7代部落会長	佐藤 栄吉氏	昭和21年1月1日より昭和21年12月31日まで

8代自治会長	石垣政五郎氏	昭和22年1月1日より昭和23年12月31日まで
9代自治会長	佐孝 助市氏	昭和24年1月1日より昭和24年12月31日まで
10代自治会長	石垣徳太郎氏	昭和25年1月1日より昭和25年12月31日まで
11代自治会長	加藤 久松氏	昭和26年1月1日より同26年12月31日まで
12代自治会長	伊佐田省三氏	昭和27年1月1日より同30年12月31日まで
13代自治会長	鈴木兼五郎氏	昭和31年1月1日より同32年12月31日まで
14代自治会長	田中 貞吉氏	昭和33年1月1日より同38年12月31日まで
15代自治会長	畑宮八三郎氏	昭和39年1月1日より同47年12月31日まで
16代自治会長	佐々木悉郎氏	昭和48年1月1日より同年12月31日まで
17代自治会長	牧野吉太郎氏	昭和49年1月1日より同年12月31日まで
18代自治会長	佐孝 秀夫氏	昭和50年1月1日より同51年12月31日まで
19代自治会長	工藤与三郎氏	昭和52年1月1日より同53年12月31日まで
20代自治会長	栗山一三郎氏	昭和54年1月1日より同55年12月31日まで
21代自治会長	大高綱千代氏	昭和56年1月1日より同61年12月31日まで
22代自治会長	田中 正氏	昭和62年1月1日より現在に至る

以上の通りであるが、就任期間の不明な点が2、3あるが氏名及就任に於ては間違いがない。

2、3の例を除き就任期間は久連に比較して短期間で就任者数も多く、長浜的特色とも言える。

各地区共に同様であるが戦時体制下に入った昭和10年代はこの前後を通じて例のない、強制的な組織に総合され、戦時一色のものとなっている。

昭和17年2月1日選任

部落会長	高野 清	村議員漁組会長
総部部長	岡田幾次郎	後漁組監事
教化部長	石川 熊吉	前村議員
産業経済部長	柴田作五郎	前会長村議員
警防部長	石川運五郎	村社総代
衛生部長	宮松与次郎	
森林防火部長	石垣政五郎	後会長
銃後奉公部長	佐藤 栄吉	後会長、村議員
経理部長	森元 信義	次期会長
第1隣保班長	牧野 吉蔵	後村社総代
第2 " "	畠山 三郎	部落社代表
第3 " "	佐孝 助市	9代会長
第4 " "	石垣徳太郎	久小PTA会長
第5 " "	加藤 久松	11代会長
第6 " "	進藤礼次郎	

そして2年後の昭和19年の役員名簿を見ると大幅に組織替が行なわれている。

会 長	森本 信義	各町審議委員
総務部長	佐藤 栄吉	後村会議員
教化部長	右に同じ	
納税部長	畑宮八三郎	15代会長、後村町議員、漁組理事
会計部長	右に同じ	
産業部長	加藤 久松	11代会長
経済部長	右に同じ	
警防部長	山崎 外吉	村社総代
建民部長	石垣徳太郎	後に村議員
森林防火部長	石垣政五郎	8代会長
社会部長	鈴木兼五郎	13代会長
銃後奉公部長	兼 任	
婦人部長	宮松 ノブ	婦人会審議員
第1隣班長	田中 貞吉	14代会長
第2 " "	小林 栄蔵	第一納税組合長
第3 " "	柴田 市郎	
第4 " "	石垣政五郎	8代会長
第5 " "	工藤 末蔵	役場職員
第6 " "	大高千代太郎	後町議員漁組理事

このように新しく3部を増設し戦争遂行の為の社会機構を統一したのである。

民主化された戦後の自治会組織は現在も同じである。(平成元年3月現在)

長浜自治会長	田中 正	仙法志森林愛護連合会会長
"副会長	牧野 幹雄	(書記会計兼務)
第1班班長	保田善太郎	
第2班 " "	畑宮 公	畑宮食品KK
第3班 " "	佐藤 佐吉	
第4班 " "	森本 清栄	前町議教育委員
第5班 " "	森本 正勝	

(2) 部落内役職公職者 (村、町会議員)

服部安太郎	明治45年5月22日より大正3年5月21日まで
森本金太郎	大正5年5月30日より大正9年5月29日まで
柴田作五郎	大正7年5月30日より大正11年5月21日まで
鈴木伊三郎	大正11年5月22日より昭和3年5月21日まで

榎 芳郎 昭和3年5月22日より昭和12年4月23日まで
高野 清 昭和13年5月22日より昭和22年1月30日まで
石川 熊吉 昭和12年5月18日より昭和22年4月29日まで
佐藤 栄吉 昭和22年4月30日より昭和36年5月31日まで
畑宮八三郎 昭和26年4月30日より昭和37年9月14日まで(32年~36年を除く)
石垣徳太郎 昭和26年4月30日より同30年4月30日まで
佐孝 留蔵 昭和30年5月1日より同31年7月4日辞職
工藤与三郎 昭和36年10月7日より同37年9月14日総辞職により辞職
牧野吉太郎 昭和37年10月10日より同61年10月9日まで
大高千代太郎 昭和37年10月10日より同45年10月9日まで
森本 清栄 昭和49年10月10日より同53年9日まで

以上のように間断なく町村議員を出し、町村は無論の事、地域住民の為に活躍し、自治会運営に強力なる協力者としての重鎮であり、多い場合3名の議員を出している。

ただし、現在は議員は出ておらず、地域事情がうかがわれる。

○長浜地区住民の生活安定の為に厚生大臣の委嘱による戦後の民生委員として貢献した人。

森本 信義 昭和23年7月より同33年11月までの10年間余り

榎 まつえ 右に同じ

坂 弘 昭和32年12月より同38年11月までの6年間

坂 よし 昭和38年12月より同46年11月までの8年間

工藤与三郎 昭和46年12月より同55年11月までの9年間

田中 正 昭和55年12月より同61年11月までの6年間

佐藤 勉 昭和61年12月より現在

○教育委員 (戦前の学務委員)

榎 芳郎 昭和5年より2年間

坂口勝次郎 昭和7年から5年間

石川 熊吉 昭和16年の1年間 法改正

柴田作五郎 昭和16年の1年間 法改正

戦後の昭和27年に教育改革により、新しく仙法志村教育委員会が設置された。当時初め教育委員として健在である森本清栄氏が就任したのである。

その後昭和31年9月1日より仙法志、沓形が合併して利尻町となって引き続き務めた。同35年11月を以て退任している。

また、昭和39年11月より、工藤与三郎氏が任命されて同59年11月までの20年間に務めを全うした。

社会教育委員には昭和29年より同35年に亘り、森本信義氏が委嘱され、次に佐藤栄吉氏は昭和31年より同42年までであった。

農業委員会法執行による委員は

笠谷 清一 昭和22年7月21日より昭和29年7月15日まで
 坂 弘 昭和22年7月21日より同47年7月14日まで
 森本 信義 昭和26年7月21日より同32年7月19日まで
 田中 貞吉 昭和47年7月20日より同56年7月19日まで
 畠山 金治 昭和56年7月20日より現在

大正6年に仙法志農会役員として本間三平氏が選ばれているが他は不明である。

○消防団設置条例により昭和22年8月より消防委員が設けられ、この地区からは、

石垣徳太郎 昭和26年6月23日より同29年5月4日まで
 牧野吉太郎 昭和35年5月より同41年5月まで

(3) 仙法志漁業協同組合の役員

地区代表として、服部安太郎、森本金太郎、榎芳郎、柴田作五郎の各氏がいるが他は不明である。

理事長 高野 清

戦前戦後を通じて、村内外の政治経済、教育の分野活躍した人で、部落会長、村議員でもあったが昭和22年1月30日を以て、マッカーサー司令による、レッドパージによりすべての公職を辞した。

漁業冷蔵庫建設の創始者でもあった。

監事 岡田幾次郎、理事に畑宮八三郎、伊佐田省三、大高千代太郎、栗山一三郎の各氏（順不同）等が長浜から選出され運営に当たった。

理事 牧野吉太郎 昭和33年より現在に及び、海区調整委員でもあり長期間務めている。31年間

組合長 牧野吉太郎 昭和54年より現在

監事 大高網千代 昭和48年4月より現在までの16年間

(4) 森林愛護組合

戦前は同組合を部落会内に森林防火部として組織替えが行なわれたが戦後になって元に復した連合体である。

従って、仙法志森林愛護組合連合会の単位組合である、長浜森林愛護組合である。会長には

石垣政五郎 戦時中から終戦時まで

牧野 吉蔵 終戦時より30年頃まで

牧野吉太郎 30年頃より 組合長

牧野 清三 32年頃より 組合長

田中 正 昭和47年より組合長

佐藤 清治 昭和56年より組合長

連合組合長 牧野吉太郎 昭和32年より

連合組合長 田中 正 昭和56年より

森林伐採 山菜採取 森林の間伐、山火予防等重要な権限を持って経済団体である。

(5) 水難救済会

漁組に本部がおかれている。昭和27年当時の組長は伊佐田省三氏であった外は不明である。現在は組長に佐藤清治氏で保田善太郎、加藤正美、島山信夫の各氏ら4名の所員になっている。

(6) 納税貯蓄組合

当組合は長浜には2組合に編成されている、そして各地区からの連合体組織にもなっている。

昭和32年当時の役員は次の各氏

長浜第一 組合長 田中 貞吉氏
副組合長 伊佐田省三氏
理 事 小林 栄蔵
監 事 黒沢富太郎

そして現在の第1組合の役員各氏は

組合長 小林 栄蔵(死去)から田中正氏である。

長浜第2組合の昭和32年当時の役員の各氏

組合長 佐藤 栄吉 副組合長 大高千代太郎
理 事 石垣徳太郎 監 事 工藤与三郎

これらの殆どの役員は死去している。

その現在の組合長は佐藤吉実である。

(7) 旧村社仙法志神社総代に地区代表して

森本金太郎、柴田作五郎、山崎外吉の各氏で戦後、石川運五郎、牧野吉蔵の各氏と続き、近年では栗山一三郎氏であったが死去後は、加藤健一氏がなり、次いで加藤正美氏が現在である。

(8) 消防関係

旧仙法志村に消防組が発足したのは大正2年3月であった。その前に青壮組という消防活動した団体があった。

その後、仙法志村3部に分割して火防組合を編成し、長浜は第3部に所属した。

大正6年鈴木幸三郎、大正7年中島与伊太の各氏が選出されている。

昭和10年には警防団と名称が変わり、行政組織の中に組込まれて、部落会警防部を設け、戦時体制の強化策としての処置で、この時、山崎外吉氏が部長になっている。

戦後の昭和22年の8月に、仙法志消防団と元に復して新しい体制になった。

そして現在のような組織になり、消防委員会を設けて運営された。

昭和35年に11月15日に、仙法志、杓形が一つになって利尻町消防団となった。

そして、久連長浜は第5分団となって同50年から、防火水槽、53年消防器具置場新築、54年に小型ポンプの配置が行われた。

第5分団長には鈴木兼五郎、牧野吉太郎氏、大石茂夫、正座勝見、小野美秋、佐藤吉実、佐孝秀夫で現在は田中正の各氏である。

4. 文化団体

(1) 青年会

大正元年12月に至り、シサンベツ1円、(久連、長浜)の青年団体組織、大正団が発足し、大正5年になって、久連、長浜が各々分離独立したが久連は消防団の性格の為か厚生団の管割下におかれた。会長は平田金二氏で久連在住者であるが昭和9年11月まで続き、昭和10年からは仙法志青年団第六分団になった。代表者を分団長と呼ばれ昭和21年まで続き、後に民主的青年会が組織された。

大正団は団結心と風紀振肅を目的とし、満17歳以上40歳までとし、大正元年の予算40円であった。

昭和10年からの分団長は本間繁氏で祭典青年樽御興を初めて出すなど活躍したという。

昭和21年1月26日に男52名、女27名計79名、初めて男女1つになった長浜青年誠和会の企画的な発足をみたのである。

会長石垣一男氏で、引き揚者慰安演芸会が行われ、5、6年間は仙法志劇場営喜座で毎年青年会連合会主催で華々しく行なわれた。

中でも、昭和25年8月16日に開催された、全島青年団体対抗野球では長浜青年の圧倒的な活躍で優勝した。

監督が牧野、投手に鈴木、口上、補手に児玉、他に加藤、馬淵、古山、栗山の各選手等7名であった。

また町村対抗野球大会その他にその活躍には目を見張った。

また、この当時、仙法村招魂祭行事として行なわれた、ノド自慢コンクール大会には、石川政士、佐孝秀夫両氏優勝し長浜住民を涌かせたものだった。

後に山崎進氏、牧野昭吉氏であるが、以後の会長に、牧野昇氏、副会長に田中幸男、小林寿子の両氏、それに、花田勝利会長、馬淵久雄氏会長などの名前が見られる。

久連青年会同様に仙法志年間の各行事には積極的な協力を以て地域住民は大きな期待感を持った。

しかしながら、鯨不漁と皆無により出稼ぎと過疎化で自然消滅した。昭和40年頃には青年の姿を見るのが珍しいという状態となった。

戦前の女子青年団、そして少年団も全く久連と同じ状態であった。

(2) 婦人会

明治年代からの愛国婦人会は昭和17年6月まで続いた。一方国防婦人会は愛国婦人会を見直す結

果として、国策一環としても組織されたものである。

そして、昭和17年6月15日に大日本婦人会仙法志村支部として強制的に設けられた。以前の両婦人会を統合して一本化したものである。一時は部落会内組織内に入れた。

戦後、民主的婦人団体として仙法志婦人会が生まれたのである。

愛国婦人会は統合されまでの会長として、当時村長夫人の東田トメ氏で、幹事に長浜からは榎マツエ、宮松ノブの両氏であり、評議員に石垣タネ氏になっている。

国防婦人会は分会長東田トメ、長浜から分会長として榎マツエ、部長に宮松ノブ、評議員に笠谷ミネ、石垣タネ、石川サダの各氏等になっている。

統合された、大日本婦人会仙法志村支部は、支部長東田トメ氏を始め、村有力者が殆ど名を連ねている。

参与名で高野清、審議員に榎マツエ、宮松ノブ、石垣タネの各氏等になっている。

事業計画では、1.出征軍人家族の慰安、2.乳幼児健康相談、3.慰問袋の作成、4.貯蓄組合の結成、5.尊徳像の寄付、6.茶穀献納運動、7.金属回収の件などとし、各部落を班として7班、会員数505名として再発足した。

長浜班

班 長 宮松 ノブ

副 班 長 榎 マツエ

第1組長 牧野 タミ

第2 “ 末永 リツ

第3 “ 佐孝 ハナ

第4 “ 坂 ヨシ

第5 “ 笠谷 ミネ

第6 “ 栗山 タミ

会 員 名 牧野タミ、牧野八重、山中シモ、牧野ヨシ、黒沢ミツ、牧野はぎ、花田スエ、花田ヒサ、田中イワノ、牧野キノ、花田ハナ、兼平ミヤ、石垣ツヤ、森本ナヨ、森本タミ、岡田マサ、古山ツマ、小林ウラ、小林トメ、末永リツ、高野ミヨ、畑宮キミエ、森本タケ、坂口チヨ、宮松ノブ、松山ツタ、石川サダ、石川千代、石川美恵、佐藤ウハ、権城ナカ、権城アサヨ、権城トミエ、伊佐田マキ、石川タマ、畑宮ミヤ、畑宮リサ、新家シモ、山崎キサノ、牧野キン、牧野イネ、佐孝ハナ、柴田をと、柴田キヨ、坂 ヨシ、石垣フジ、石垣房江、石垣タネ、石垣セナ、石垣サガ、田中ソナ、佐藤トキ、佐藤フクノ、堀井ヨシ、榎マツエ、加藤リサ、大高コン、栗山タミ、栗山サク、進藤キミ、北沢ハナ、杉瀬八重、笠谷ミネ、鈴木ツネ、佐藤キヌ、花田ヨシ

昭和17年6月8日、以上64名、扱者、宮松ノブ
になっている。

戦後になってこの団体は解体し、民主的な婦人団体が誕生した。

婦人の地位を高め、文化生活の向上に寄与する事を趣旨とする仙法志村婦人会が会長に中島八重氏を選出し、会員400名を有する社会教育団体として将来を期待される団体として発足した。

当初の長浜地区の役員は詳細不明であるが以前も昭和33年頃に大きく顔ぶれは変わっていないと考えられる。理事に榎まつえ、馬淵トヨ、田中イワノの各氏、同40年には馬淵トヨ、田中イワノ、牧野八重の各氏で、昭和42年には部長、馬淵トヨ、理事榎まつえ、田中イワノの各氏らで部落実行委員としては杉ツタ、畑宮君枝、森本タネ氏らの名が出てきている。

同47年の役員改選では部長に馬淵トヨ、理事に牧野八重氏の各氏であった。49年の改選では、部長牧野八重氏となり、続いて工藤京、石垣ツルの各氏となるが50年代後半になって各部婦人会は自然消滅して行った。

人材難、冬期間の出稼ぎ、世代交替とその対応、意識低下などの諸問題を解決できなかった事が原因に上げられている。過疎化されてきた象徴的な姿ともいえる。

(5) 体育協会

これは仙法志村体育協会と呼び、全村全戸加入で現在に至っている。

役員は理事として各自区別に義務的に選出され、時には一般役員として地区毎に4名を決定している。

協会の性格上青年会会員で殆どで占められていた。幹部はその当時の有志公職者であった。

当初よりの地区役員は不明であるが、昭和31年時では理事に田中与三郎、加藤正美、田中正、牧野登の各氏であった。

同38年には、花田勝利、石川千里、佐藤勉、田中幸雄の各氏等で、現在では、牧野幹男、牧野勇治、富山信夫、佐藤保の各氏である。新年度は改選期で、苦勞の多い役員と地区間住民の高令化の為に心配の種になっている。

牧野幹男氏は野球部監督をしている。

(6) その他の組織や団体

各地区にある組織や団体と同様で長浜のみのものはない。

NHKテレビの難視聴区域にある長浜西端部は共同アンテナ受信組合に入っており、久連地区と同じである。

(7) 長浜自治会館

戦後の長浜青年誠和会の活動の場として坂ノ上に会館が作られ後に長浜神社の建物が使用された。それは青年会が中心になり地域の協力の元に作ったものであるが、前述のように昭和30年代後半には自然消滅した青年会より運営が自治会に移行し、町補助により同49年5月23日新築され、続いて同57年6月2日に町費補助として長浜自治会に136平方メートル、927万5千円を似て現在地に

新築落成した。同62年には後部浜側に和室三室を増築し、地区内の行事や催や葬儀場としても幅広く活用されている。

5. 教 育

(1) あらまし

最も遅い移住の地域であるが子供の教育の環境はよくなかった。当初の大久連に開校したのは明治30年7月であった、同35年9月に現在地移転されるまでは道路事情などから通学が容易でなかった。仙法志校への通学は何倍もの遠距離であった。

しかし、この当時の長浜住民の事情を知る何ものもなく不明である。

更にまた、昭和15年まで高等科は仙法志校へ通学しなければならず、久連小学校卒業の全員は通学できなかったら、途中で止めたりした。

そして、昭和10年代以降は小学校に対する影響力は久連と入り替り長浜に移ったのであった。

しかし、極度な過疎化現象は進み、昭和62年3月30日に廃校に追い込まれたのである。(久連小学校の通学区域は当初より久連・長浜の二地区であった。)

(2) 保護者並びにPTA、他

昭和14年までは当初より久連、平田豊作、加藤幸助の両氏、外に山上、沢田の各氏等の力が大きかった。戦前の父兄の組織である保護者会は平田氏会長で約40年間続いたのである。同氏死去後は、柴田作五郎氏となり約8年間、続いて佐孝助市氏と長浜住民である。昭和22年1月にPTAと新組織になり、会長の長浜出身者が殆どであった。

初代会長 笠谷清一氏 (長浜、5年間)

2代会長 森本信義氏 (長浜、6年間)

3代会長 石垣徳太郎氏 (長浜、6年間)

4代会長 佐々木忍郎氏 (長浜、6年間)

5代会長 門田真一氏 (久連、2年間)

6代会長 佐々木忍郎氏 (長浜、4年間)

7代会長 岡田一雄氏 (久連、12年間)

8代会長 川原 理氏 (久連、1年間)

また、会としては直接関係しないが、柴田豊蔵、栄作両氏の寄贈。(昭和29年、30年)

次に昭和34、5年当時のPTA役員を記すと、(関係分)

会 長 石垣徳太郎

副 会 長 門田真一

” 佐々木忍郎

運営委員 牧野富吉、古山善市、桧山利夫、佐藤吉実、馬淵寅次郎、鎌田タケノ、畑宮フミエ
杉 ツタ、森本 タミ、塩谷 ミサ、栗山 チエ

また、昭和42年4月現在では

会 長 佐々木忍郎

副 会 長 門田真一、栗山一三郎

会計監査 工藤与三郎、藤田長利

役 員 田中 正、富山金治、桧山利夫、古山善市、正座勝見、大高綱千代、森本フミエ、
花田ヒサ、佐藤ハツ、杉 ツタ、坂 ヨシ、工藤 京 以上

次に久連中学校は昭和55年4月より仙法志中学校に統合されて、中学校父兄は仙中PTAに統合された。

また、昭和62年3月に久連小学校が廃校となって、PTAは仙法志小学校PTAに統合された。

昭和36年の60周年記事、46年、56年の同行事の協議会会長も長浜であった。

(一部は年報7号に報告し32頁)

またここで、これまで不便で何とか考えていた久連小学校高等設置に関してである。

昭和15年3月に無論両地区協力によるものであるが、中心になって実現に奔走したのは長浜の人々であった。校史の文面をあげると、

昭和14年12月18日

緊急保護会役員会を午後5時より開催

役員高野村議、理事者との交渉経過を説明、左記事項を決定す。

1. 当校高等科併置のこと
2. 部落全体の運動となすこと
3. 陳情委員を設け陳情書を作成、委員陳情すること

陳情委員 村議 高野、石川、正座、柴田、佐藤、小屋、阿部、北辻、森本、益田、

3月20日

3月18日付高等料併置認可の件、支庁より電報受領す

当校、校下保護者多年高等料併置を希望し是日的達成の為諸般の事項を整え、請願漸く目的を達し、校下挙げて喜びにひたる。

当併置に伴う校下父兄の寄附者氏名左の如し、

石川 熊吉、柴田作五郎、高野 清、岡田幾次郎、畑宮八三郎、畠山 三郎、桧山 留吉、
桧山 弥市、杉瀬平太郎、坂 辰次郎、森本 信義、笠谷 竹造、石垣政五郎、宮松与次郎、
石垣徳太郎、牧野 清三、佐孝 助市、加藤 久松、田中 三蔵、石垣 武国、田中 貞吉、
鈴木兼五郎、榎 まつエ、山中 慶吉、大高千代太郎、佐藤 栄吉、山崎 外吉、佐藤久次
郎、栗山与五郎、大宮喜一郎、石川運五郎、小林 栄蔵、伊佐田省三、進藤礼次郎、石川 養
吉、新谷 伊作、兼平 福蔵、牧野 吉蔵、森本 辰男、末永 金蔵、黒沢富太郎、牧野力太
郎、石垣 市松、佐藤 久治、坂口勝次郎、花田喜代作、古山善四郎、大畑 栄作、堀井久治
郎、石垣 留治、畑宮小一郎、権城 仁作、岡田 久六、石垣 満、本間初太郎、花田千代
作、牧野長次郎、小玉 丹治、石垣 ハワ、

以上寄付者数58名、久連と合わせて寄付金総額金759円であった。

次の記録には、而して是の目的達成に当たり村議高野清氏よく村理事者諸橋村長と交渉計画の実現の端緒を造り幾多の困難を克服したること、併置問題を省みる時忘れ得ぬ事項たり。

寄付金問題に関しては村議高野氏、石川氏、正座氏、保護者会会長柴田氏の盡力また大なるものあるを是に銘記す。

とある。

以上の事に依って今までの通学の難儀は解消され、特に長浜地区住民は子供の通学に一安心したのである。

戦後の学制改革による新制中学校が発足して仙法志中学校に通学させなくてもよかったのも、これが大きく影響したと考えられる。

他に中学校総合には父兄保護者の不安があり、他校に生徒を通学させるについて心配があった。62年廃校に際しては卒業生の殆どが愛惜の情が涙で終わった。

また、終戦後から30年代にかけて地元より多くの教員が長浜から誕生した。

栗山清治、馬淵正治、榎勝見、杉一雄、鎌田金一各氏ら地元母校の教員として教壇にたち、久連校の伝統を築いたのであった。

更に、仙法志小学校に通う児童4名、仙法志中学校に通学する生徒はなしである。

(5) 遺族会関係

無論、戦没者を出した家庭の組織である。長浜出身者で太平洋戦争（第2次世界対戦）で出征し犠牲者となった兵士で、その氏名を記す。（敬省略）

牧野清治は沖縄本島で、S20年5月10日

黒沢正義氏はフィリピンで同じ20年5月17日

保田道義はフィリピンで17年5月6日

佐孝秋男は沖縄本島で20年6月16日

松山栄男は沖縄本島で20年6月20日

佐藤武治は佛島南方で20年6月18日

工藤良彦はサイパンで20年7月8日

佐藤佐一は所は不明であるが20年6月

齊藤義雄はソ連の病院で21年4月24日

岡田 一は南方ガタルカナルで17年9月10日

森本は昭和8年に戦死している。

以上であるが殆どの遺族の家庭は現在この地に居住している。

6. 人口の変化

当地区の人口動態をみると、常に旧仙法志村総人口数全体の15%であったが、昭和30年以降は比率が低下し続けている。

そして現在は仙法志地区の約8%であり、この傾向は今後も続くものと思われる。

当年報第7集(21頁)に報告したが、この地区の最初の移住者年代は明治20年代後半と推定されるし、また、旧仙法志村各地区中最も遅いものと考えられる。

既述のように移住者の経路は久連への移住者の経路とは異なっている。

年次	仙法志村		長浜地区	
	戸数	人口	戸数	人口
大正 5年	670			
" 10年	630	(95)		
昭和10年	494	3,035	60	383
" 13年	493	3,118	63	342
" 17年	455	2,867	64	400
" 25年	526	3,528	74	491
" 30年	"	3,492	60	458
" 35年	560	3,035	74	403
" 40年				
" 45年	477	2,308	54	271
" 56年	403	1,222	43	115
" 63年	382	1,044	35	85

表2 仙法志地区戸口の推移

大正時代の鯨漁の豊漁の全盛時代と戦後の昭和25年当時の人口最多時に比較すると戸数は約3分の1と激減し、人口は5分の1以下となっている。

転々と回数を重ね移動し生活した人々の内面にも一因があるように考えられる。

現在までの間に最大戸数で旧仙法志村全盛時代であった長浜の移住者氏名は次の通り。

No.	大正 7 年	昭 15 年	現 在	出 身 県
1	本間 三平	初太郎	なし	新潟
2	兼平石太郎	福蔵	福蔵	青森 現住
3	田中 定吉	貞吉	幸男	新潟 現住
4	牧野清次郎	清蔵	清蔵	秋田 現住
5	牧野 吉蔵	吉蔵	吉太郎	秋田 現住
6	花田 喜助	喜代作	ヒサ	青森 現住
7	花田千代作	千代作	勝利	青森 現住
8	鈴木伊三郎	なし	なし	福井
9	保田安太郎	なし	善太郎	福井 現住
10	大場 春治	なし	なし	秋田
11	古山仁太郎	善四郎	善市	青森 現住
12	初馬 鹿造	なし	なし	福井
13	川端 末吉	なし	(晴雄)	道内 現住
14	石川運五郎	運五郎	なし	秋田
15	石川 熊吉	熊吉	なし	秋田
16	藤田伊三郎	なし	なし	秋田
17	片山利右エ門	なし	なし	岡山

18	佐々木民蔵	なし	なし	鳥取	
19	三浦己之作	なし	なし	不明	
20	森本 元蔵	信義	佳幸	鳥取	現住
21	森本 藤八	不明	不明	鳥取	
22	森本仙太郎	不明	不明	鳥取	
23	森本金太郎	不明	不明	鳥取	
24	畑宮与之吉	八三郎	公	石川	現住
25	宮松与次郎	与次郎	なし	富山	
26	森本 松蔵	不明	不明	鳥取	
27	千貝長太郎	なし	なし	秋田	
28	末永 金蔵	金蔵	なし	宮城	
29	小林勇次郎	栄蔵	とめ	新潟	現住
30	畠山 勝蔵	三郎	なし	秋田	
31	岡田長四郎	幾次郎	なし	鳥取	
32	坂口勝次郎	勝次郎	なし	鳥取	
33	高野席次郎	清	なし	石川	
34	桧山 弥市	弥市	なし	秋田	
35	石沢 鶴松	なし	なし	道内	
36	大久保勘蔵	なし	なし	青森	
37	鈴木寿三郎	なし	なし	秋田	
38	新谷富太郎	なし	なし	道内	
39	辻 善十郎	なし	なし	青森	
40	加藤 酉蔵	なし	なし	秋田	
41	権城 仁作	仁作	なし	石川	
42	伊在田長蔵	省三	なし	鳥取	
43	黒沢亥之吉	富太郎	富太郎	秋田	現住
44	石垣 多吉	なし	野中へ	秋田	
45	佐々木与一郎	なし	なし	道内	
46	牧野長次郎	長次郎	勇治	秋田	現住
47	山崎 外吉	外吉	なし	福井	
48	石川 運作	要吉	なし	秋田	
49	三浦清太郎	清太郎	なし	秋田	
50	加藤長十郎	長三郎	久連へ	秋田	
51	三浦専之助	政吉	久連へ	秋田	
52	佐孝金之助	助市	秀夫	福井	現住

53	柴田作五郎	作五郎	なし	新潟
54	柴田末太郎	なし	なし	新潟
55	鈴木 源八	なし	なし	不明
56	円山 健吉	なし	なし	新潟
57	柴田仙之助	なし	なし	不明
58	宮崎勤太郎	なし	なし	鳥取
59	新谷辰之助	伊作	なし	福井
60	石垣 長保	不明	なし	秋田
61	阿部 浅吉	なし	なし	秋田
62	進藤礼次郎	礼次郎	なし	秋田
63	石垣政五郎	政五郎	弟武国	秋田 現住
64	石垣三之助	不明	不明	秋田
65	筒井 信一	なし	なし	秋田
66	石垣 三蔵	不明	不明	秋田
67	鎌田利太郎	なし	なし	秋田
68	佐藤 平太	栄吉	吉実	秋田 現住
69	荒木善之助	なし	なし	秋田
70	堀井久次郎	久次郎	なし	秋田
71	佐藤 久七	久次郎	勉	秋田 現住
72	松枝 鶴松	なし	なし	秋田
73	鈴木与次郎	兼五郎	なし	秋田
74	本間 又吉	なし	なし	秋田
75	榎 秀治	マツエ	工藤	秋田
76	米脇作太郎	なし	なし	青森
77	笠谷 竹蔵	竹造	なし	石川
78	猪股 伝蔵	なし	なし	道内
79	山口 石松	なし	なし	道内
80	横山藤五郎	なし	なし	不明
81	工藤 吉蔵	なし	なし	山形
82	加藤久次郎	久松	健一	石川 現住
83	枘田 和吉	なし	なし	福井
84	服部安太郎	なし	なし	宮城
85	佐藤重佐エ門	不明	不明	不明
86	杉瀬平太郎	平太郎	なし	石川
87	中村 勇市	なし	なし	道内

88	佐藤久治郎	久治	キノ	秋田	現住
89	中島与伊太	なし	なし	不明	
90	山中 慶吉	慶吉	なし	青森	
91	石垣 乙松	市松	なし	秋田	
92	石垣 佐吉	留治	なし	秋田	
93	安田 政吉	なし	なし	秋田	
94	加藤 三郎	なし	なし	秋田	
95	桧山 留吉	留吉	利夫	秋田	現住

以上であるが出身県が秋田 3 名、石川 3、鳥取 1、福井 1 が考えられ、外は不明である。

前記に記されていない現居住者の氏名をあげると

牧野 晋吉 父 清次郎

富山 金治 父 兼蔵 (清次郎)

牧野 清 父 清蔵

富山 信夫 父 金治

森本 清栄 父 元蔵

森本 正勝 父 元蔵

馬淵 トヨ 寅次郎 (元村)

小玉こむめ 父 多治 (久連)

加藤 正美 父 久松

鎌田金太郎 親戚 (久連)

栗山サクラ 一三郎 (久連)

正座みどり 勝見 (久連)

外に、佐藤佐吉、石垣満の各氏等姓としては記載されているがその関係は未調査不明である。佐藤清治氏は父本治で秋田県出身である。

大正 7 年から現在までの住民の動きの一部を記したが、どの地域も同様な傾向なのかもしれない。何れにしても定住性の低い事を物語っていると言えよう。

7. 宗 教

(1) あらまし

長浜地区内における宗教分布図をみるに、神道関係では部落社、祠各一あって、佛教関係では殆ど仙法志本町に存在する各寺院の信者になっており、旧両隣村に存在する寺院の信者はない。新興宗教の信者もいる。

彼は重複しながら民間信仰の幾つかを信仰している。

また、戦時中に一時宗教結社があったが実は結ばなかった。

(2) 長浜神社

由来は明治30年頃に鳥取県岩美郡面影村から来島し、鯨定置建網業を経営した佐々木民蔵氏に始まる。

漁業を営む以上、豊漁を祈願する心情から郷里の漁業神、「豊受稲荷大明神」を祭礼する為の2平方メートル四方の祠を建立した。

その位置は現在富山氏宅の所に鯨番屋があり、その山側の小高い丘にあった。

従って佐々木個人の祭祀で、その近所、同郷出身者によって毎年毎月の祭礼日には盛大に行事が催され、昭和の初期まで続いてきた。

地域の住民大勢を集め、因幡神楽も演じられという。それを伝える為伊佐田長蔵氏は森本清栄、佐藤久七の青年に手ほどき教授をしたものだという。

佐々木氏は出稼漁業者で漁後は鳥取に帰っていたというが大正の後期に完全にその漁場の経営を取止め引き揚げた。

その後は親戚や近隣の人々の手に依って祭られてきたものである。

昭和時代に入って戦時色濃厚となり、公的に長浜としての神社がなかった為に強制的に旧村社仙法志神社の長浜遙拝所としたのが、佐々木民蔵氏の稲荷社である。

昭和12年2月25日の無願神祠調査と昭和17年8月1日の神祠調査によると次のようになっている。

無願神祠調査票

- 一、名称 稲荷神社
- 一、祭神 豊受稲荷大神
- 一、所在地 利尻郡仙法志村長浜116番地
- 一、建物の種類広さ 木造トタン葺 塙坪
- 一、祭日 1月9日、4月9日、6月21日
- 一、崇敬者 63名 代表者名 柴田作五郎
- 一、設立年月日 明治25年7月20日
- 一、維持方法 部落寄付
- 一、役場及公認神社迄の距離数 至役場、34町、至神社、32町

次の調査は

所在地 利尻郡仙法志村字長浜

神祠称号 稲荷神社

祭神 豊受稲荷大神

由緒沿革 明治39年9月、豊受稲荷大神を勤請鎮座

敷地の坪数 40坪

所有名義者 国有未開地

建物の種類坪数 拝殿本殿兼用一坪、鳥居一基

崇敬者総代数 2人 畠山三郎、古山浅次郎

維持方法 長浜部落の寄付 1年100円

崇敬者の居住及戸数 長浜部落全部、63戸

例祭日 6月21日

積立金 なし

以上2枚の調査表をみて判るように、設立年代、祭礼日、代表者の異なっている事に注目をしなければならぬ。

戦後は自治会の維持に変わらないが、場所を旧自治会館に祭祀し、佐藤久七氏の祭祀する「八幡様」を合祀するという議が決定したが佐藤氏は自分の先祖からの神として自宅前に祭祀している。

実際には自治会長の責任に於いて維持管理され、具体的祭祀作業は班単位の当番制年交代で行われている。

(3) 佐藤の八幡様

現在の長浜に居住する佐藤勉氏の先代久七氏の時代より祭礼行事を続けてきたもので、昔程ではないがその信仰が守られている。

佐藤家は秋田県出身で郷土信仰を招来し、一立方メートル位の大きさの祠を建立し、自宅前の丘の沢にある。

昔は八幡講があって祭礼行事が盛大に行われた。

講員に、大高千代太郎、加藤久松、鈴木兼五郎、佐藤栄吉、石垣徳太郎の各氏五名で組織されていた。

幟や太鼓もあり、旅廻りの演芸団を頼み舞台を作り、また、青年の相撲大会も開かれ祭を楽しんだという。

また、佐藤栄吉氏の絵による角燈籠もあげられた。

また、郷土祭典の御輿渡御の時は必ず立ち寄り祝詞があげられているという。

このようにして、今も、佐藤勉氏は祭祀信仰している。

(4) その他の信仰

秋田出身者の多いこの地区には八幡さまの信仰が多いが、この他にも各種の信仰が混在しながら残されている。

(5) 佛教信仰

曹洞宗、(広鏡寺)

秋田県出身者の全部が曹洞禅宗の信仰者で長浜地区住民の全体の大半である。

佐藤姓、石垣姓のすべてと森本姓、その他この信者になっている。

浄土真宗の本願寺派(龍雲寺)信者は秋田衆の牧野姓に多く、その他少々である。他に越前、加

賀衆の信者に分かれている。

真宗大谷派、(西円寺)

越前、加賀衆各々信者になっているがその数は少いで青森県出身者もいる。

浄土宗、(専称寺)

森本姓を除く、因幡衆の全部が浄土宗信者で8戸あったが過疎化により現在は少々である。

日蓮宗信者はかつて1名いたが現在はいない。また、真宗高田派(授法寺)の信者はいなかったし、現在もまたそうである。天理教信者もいない。

以上過疎化された現在もその割合は変わっていない。

先祖の出身県別によるグループ的な信者構成になっている。

(6) 宗教結社 匡拯聖社

昭和18年8月に宗教結社が設立された。それを次のような報告書類が残っている。

宗教結社の教師及び信徒数報告

利尻郡仙法志村字長浜17番地

宗教結社 匡拯聖社

右宗教結社昭和18年分状況別表の通り付此段及び報告候也

昭和19年1月25日

右代表者 本西恵海

北海道庁長官 坂 千秋殿

備考

二、信徒は結社が臨済宗官長との連絡完結未済の為登載するに至らず。

宗教結社廃止届

利尻郡仙法志村字長浜17番地

宗教結社 匡拯聖社

右宗教結社昭和19年8月7日廃止致候に付関係書類相添へ此段及御届け候也

昭和19年8月7日

右代表者 本西恵海

北海道庁長官 坂千秋殿

更に添書の中の一部には廃止後の処置書

二、宗教結社匡拯聖者廃止後の布教所はその所有者たる松山留吉に返還す。

右の通り処置候也

となっている。

これは政治に森井、牧野の両氏の親類関係があって来島したものである。しかし、布教の場として適当な家屋なく、その時樺太に引越して空家になっていた所があり、これを任されていた松山留

吉氏に交渉し借用したものであった。約1年間の事であり、引越者は松山弥市氏である。

(7) 長浜御詠歌講

これは新谷辰之助氏に始まるものであり、大正の初めより住んでおり、昭和の初めにかけての人で、近所の婆さん達に御詠歌を指導した事に由来する。

人数は5、6名で講の名称は用いたかどうかは不明であるが、地元は言うに及ばず、島内一周の寒修行も行ない、浄財は各寺院に寄進したといふのである。

戦前から戦後にかけて中断していたが、かつての講員から話が盛り上がり、昭和40年代頃から御詠歌講を各自の宅を順番に宿とし練習をし、寒修業をし研讃を積んだ。

講員には、森本、森本、伊佐田、工藤の婦人達で、地区内各寺院や老人クラブに長浜御詠歌講の名称で寄進している。

これは長浜の婦人達の単独の集まりで、各宗寺院に所属したものではなかった。

また、広鏡寺、専称寺には観音講という信者の集団があって御詠歌が盛んに行われた影響もある。特に広鏡寺観音講が影響力が大きかった。

現在は老齢化や引越移転者で1、2名程残っているに過ぎず停滞している。

(8) 墓 地

長浜林道を道々より約300米程の所に、久連、長浜両地区の共同墓地がある。

20数基の石塔があって、火葬場も近くに併設していたがこれは現在廃止された。

遠隔という不便さから移設の傾向があり、また、転出家族の無縁に近い墓石もある。

8. 長浜の小集落の特色

長浜に昔より五つの小集落があって各々に一つの特色を持っている。

(1) ドンジャ町

大空沢から黒沢宅の範囲内で14、5軒の民家があって、明治後半から大正にかけて一生懸命に、ドンジャを着て年中働いた処から呼ばれてきた。

牧野家親族が大半を占めていたので、「マキノ町」と呼ばれたという。

現在住んでいる人達で明治、大正時代から続いている人が多い。

牧野家親族4軒、花田、黒沢、田中の各家である。

(2) トックリ町

一時1軒もなかった事もあり、詳細不明なことが多いが、トックリを持って毎日のように、鈴木伊三郎商店に「ショウチュウ」を買いに来た人が多かった処から、付けられた名前である。

現在、鎌田氏宅と兼平氏宅があるが、鎌田氏は戦後樺太からであり、兼平氏はその少し後に同じ

長浜から移転し居を構えたものである。引続き、畑宮水産加工場がある。

(3) ノンキ町

ここは畑宮、高野、末永、宮松を除く他は森本、岡田関係の因幡衆である。

畑宮氏は石川県、高野、宮松の両氏は富山県、畠山氏は秋田県、末永氏は宮城県の出身者であった。今は因幡衆は森本佳幸氏だけである。

現在は森本、畑宮、小林、富山の各氏の家屋4軒のみである。大正から戦前戦後に亘って14、5軒の家があった。

他の地区、謂る外からみると裕福でノンビリした生活状態であったので、「ノンキマ町」といわれたという。

続いて現自治会館付近はどう言われていたか不明であるが、桧山、石川、佐藤、佐孝、柴田の各氏関係者が多く、山崎、新谷、伊佐田、権城の各氏の家があった。

現在は、佐藤、佐孝、牧野、桧山の各氏の5軒のみで特に空家が目立っている。

(4) キラク町

現在の加藤正美氏宅から石垣満氏宅のまでを呼んでいる。

ここ石垣姓の多い所で大正時代戦後にかけて5、6軒あった。

外に榎、佐藤、加藤、小玉、鈴木等14、5軒の各氏の家屋があった。

現在の6軒町の人も何軒かいたという。

石垣長保という人がおり、石川熊吉氏と演芸団もつくったというのがどの位の規模か不明であるが、1年を喜楽に過ごした人が多かったので付けられた名前であるという。

この他は昆布も寄らないし、海藻類も生いない浜でどこの地域の人々よりも、このように、三味線に太鼓で娯楽に日を費したという。

だから、余り裕福な人はいなかったという。現在、小玉、佐藤、正座、川端、森本、加藤、石垣の各氏の9軒がのこっている。

(5) 六軒町

昭和3年火災後に移転して出来た集落である。

西の端で道路より山側の小集落で、笠谷、大高、栗山、馬淵、進藤、石川、佐藤の各氏宅で7軒であるが、6軒だけの時代があってつけられた呼び名である。

現在は、森本、大高、栗山、加藤、佐藤、加藤の各氏宅がある。

ここの特色はよくわからない。

9. 風俗習慣

秋田衆の長浜の住民は寛大さがあり、冠婚葬祭等に互助精神が培われている。

生活は質素で娯楽に生活の「ゆとり」を持っている。厳密には各先祖出身地郷土の風習をもっているが最近では均一化されている。

その外は他の域と変わったものはみられない。

10. 不幸な出来事

雪崩、流氷、不漁等自然災害はどこも同じであった。

また、戦前の大不況や戦時直前の地区内の困難はこれも同様であった。

長浜地区内に於て発生した事は不明な点もあるが、昭和3年に9日発生したキラク町の火事、昭和23年に発生した、尊族殺人事件、一昨年(昭和41年)のサックリ町の火事である。

漁業は従事者の中で海難による犠牲者は今までなかった。

詳細に見ていくと悲しい不幸な出来事は数多くあったが、今はその1つ1つを述べる事はできないのが残念である。

11. 終りに

比較的遅かった移住定着の年代の特定はできなかった。それ程資料に乏しかった。

それにしても記述しておきたかった事も数多くあったが、また、記述の必要を感じながら調査が進まず出来なかった部分もあった。未了部分は今後も調査を進めて行きたい。

更に付け加えておきたいことは、近年、どの地域も、海岸保全事業道路改良舗装工事、特に長浜地は土堤の改良工事が進み、明治、大正、昭和戦時中の面影を残さない程に景観が一変した。春に咲く花が見られなくなり、空家と道路工事に依って新築された家屋とのアンバランスが目立つ地域である。

この調査に協力を願った方々

故田中貞吉氏、故加藤久松氏、故伊佐田省三氏、御冥福を祈り厚く感謝します。

牧野清三氏、牧野吉太郎氏、田中正氏、佐藤吉実氏、桧山利夫氏、花田ヒサ氏

参考資料文献

旧仙法志村資料 大正7年以降昭和41年まで、利尻町史編集室蔵

社寺明細帳 明治37年度以降、利尻町史編集室蔵

久連小学校沿革史 明治37年度以降、仙法志小学校蔵



写真1 玄関や窓に板を張る空屋の目立つ長浜の中間集落

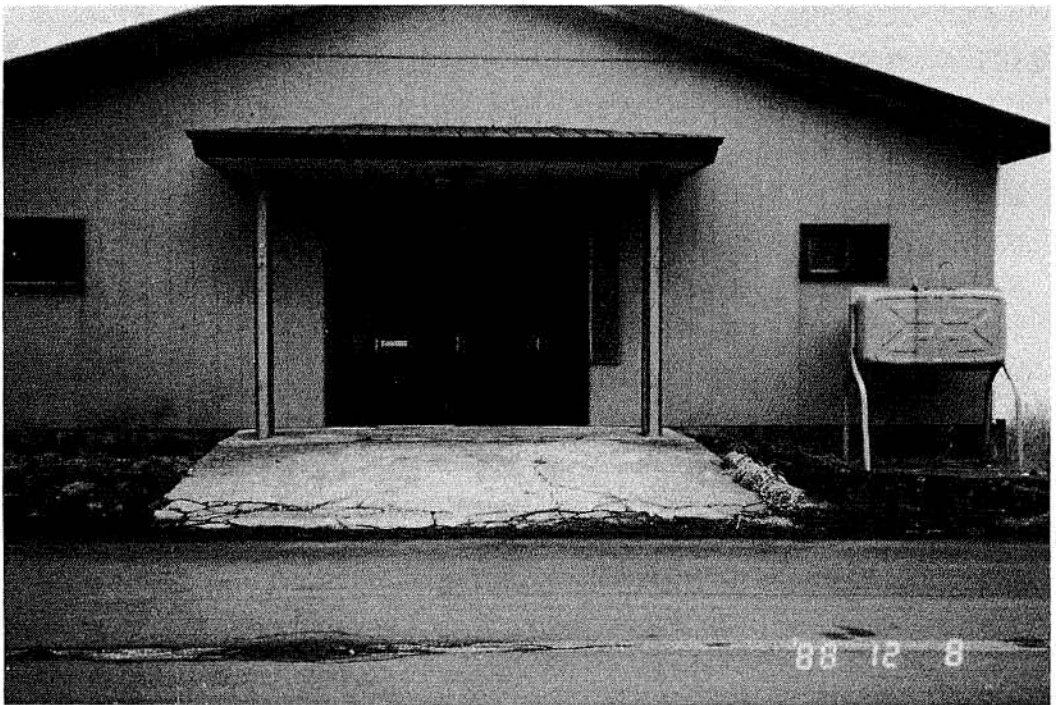


写真2 新築された現在の長浜自治会館

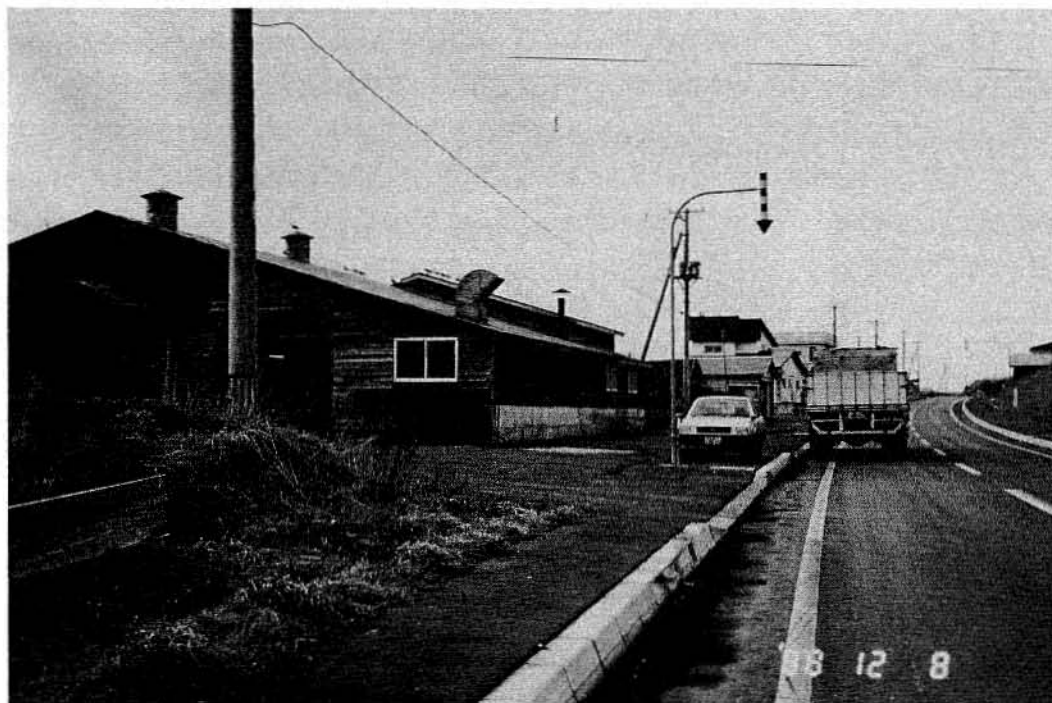


写真3 年間通じて操業を続けている畑宮水産加工場

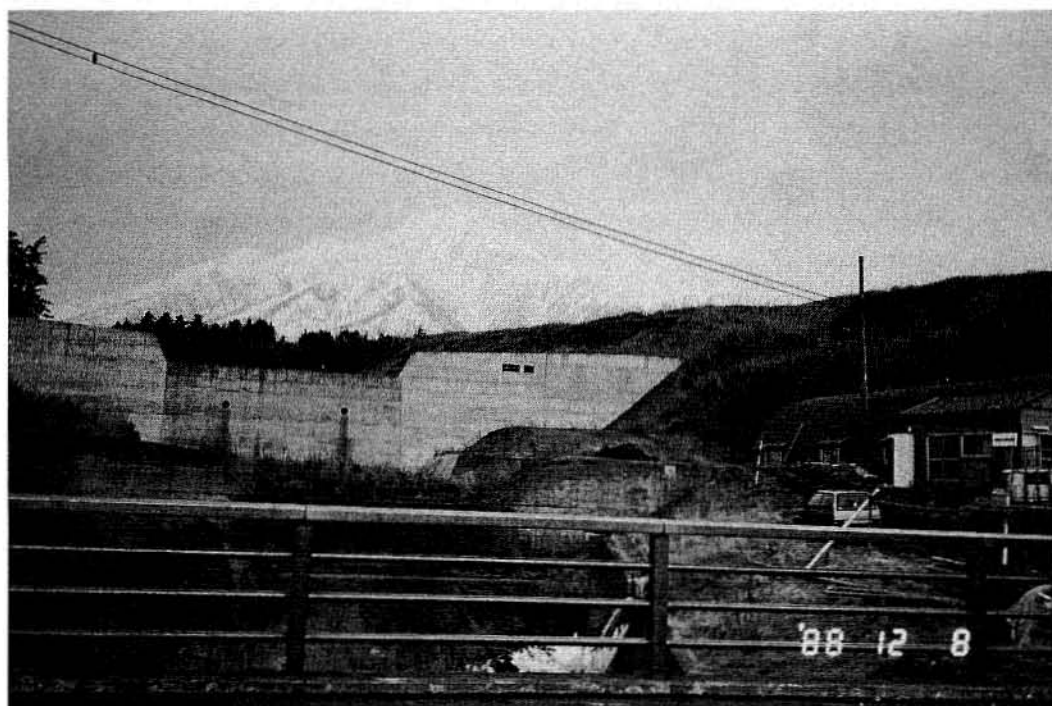


写真4 大空沢ダム（昭和61年1月完成）とサケ・マスふ化場



写真5 町営施設 さけ・ますふ化場



写真6 盛大に祭典行事の行なわれた佐藤の八幡様祠堂



写真7 現在長浜神社社殿のみとなった旧長浜自治会館



写真8 ホマ場所、神磯側から見た長浜(東端)の集落

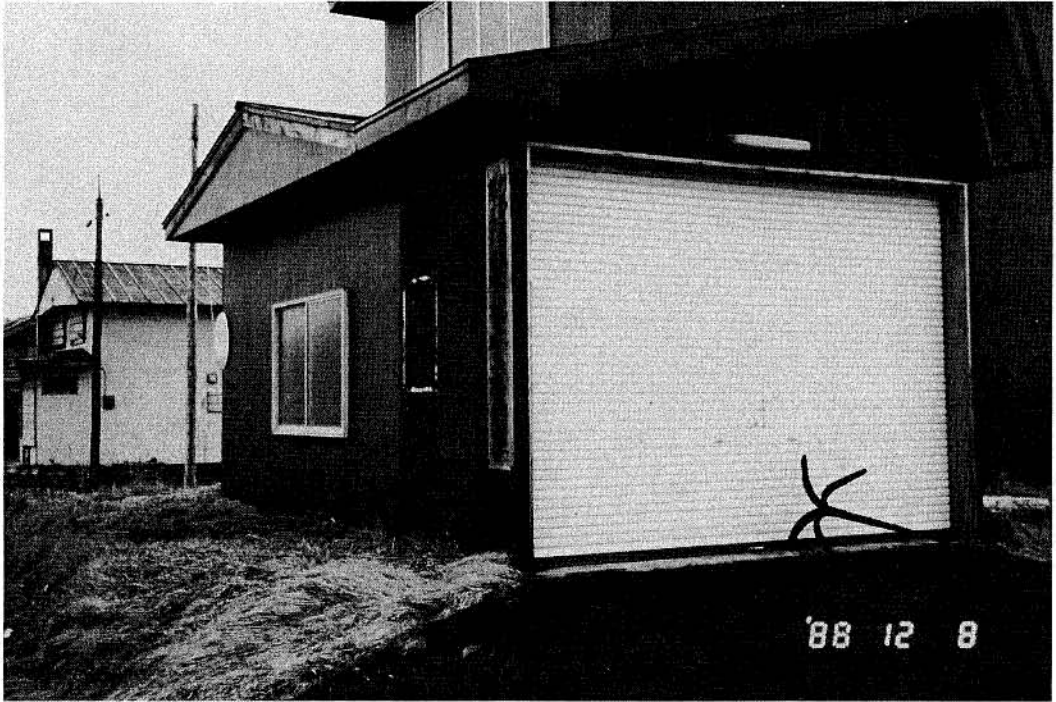


写真9 長浜(西端)に設けられた消防第5分団機械機具格納庫



写真10 長浜にある久連との共同墓地